

第一生命経済研究所のホームページご紹介

アドレス：<http://group.dai-ichi-life.co.jp/cgi-bin/dlri/top.cgi>（「第一生命経済研究所」で検索可能）
6月上旬までに上記ホームページに登場したレポートテーマの一例をご紹介します。このほか数多くの詳細な経済分析レポートが掲載されていますので、経済研レポートと合わせてご活用ください。

～ポストサブプライムの金融マーケットを考察しています。

2008/5/23 [「崩落する信用バブル（下）」](#)

掲載カテゴリ： 嶋峰義清の「マーケットウォッチング」

～景気指標から占う株価動向、およびスタグフレーションの構図を過去の例と比較しています。

2008/6/6 [「景気先行指標と株価動向」](#)

2008/5/27 [「スタグフレーション研究 30年前との比較」](#)

掲載カテゴリ： 熊野英生の「金融市場の謎を解く」

～注目される米国の経済指標、原油高、インフレに直面するアジア、アフリカ地域の経済情勢を分析します。

2008/5/21 [「米国 2008、2009年経済見通し」](#)

2008/6/4 [「アジア経済事情：原油130ドル/バレル時代がもたらす影響」](#)

2008/5/29 [「南アフリカ経済事情：インフレ圧力の亢進による景気の鈍化は必至」](#)

掲載カテゴリ： 桂畑誠治の「米国経済を探る」、西濱 徹の「アジア・新興諸国経済」

編集後記

経済を分析したり予測したりする場合に、経済モデルなどの計量的なアプローチが活用されている。たとえば、所得と消費の関係や海外の景気動向と日本の経済成長の関係など、経済事象や経済主体相互の関係を過去の趨勢で定式化して使うものだ。今後の予想に客観性を持たせる上では非常に便利な方法なので、広く普及している。実験が出来ない日本経済を対象にして、計量的な方法を使うことで、例えば為替変動や物価動向がどのように経済全体に作用していくかを試算することができる。

当然ながらこの手法は複雑に絡み合う経済活動をごく単純化して扱っている。試算で導き出される数字は、合理的であれ、かなりの限定的条件下での可能性を示すに過ぎない。このためエコノミストは自分の考えを検証したり、補強したりするためにこれらを利用するのが本筋で、算出結果自体が結論になってしまったのではまっとうな分析とは言えない。当然この手法に不向きな分析対象もある。

ところで、複数の対象について試算を行えば自ずとその結果に差が出る。さらに結果を数字の大小にして比較感を与えることもできる。目に見える形を与えられたこの数字が、時には大小のみならず優劣の色彩をも纏って、あたかも実態そのものであるかのような錯覚を引き起こすこともあり得る。エコノミストはこれらが目の粗い点描に過ぎないことを忘れず、実像を伝えることを本分とすべきだと肝に銘じたい。(H.U)